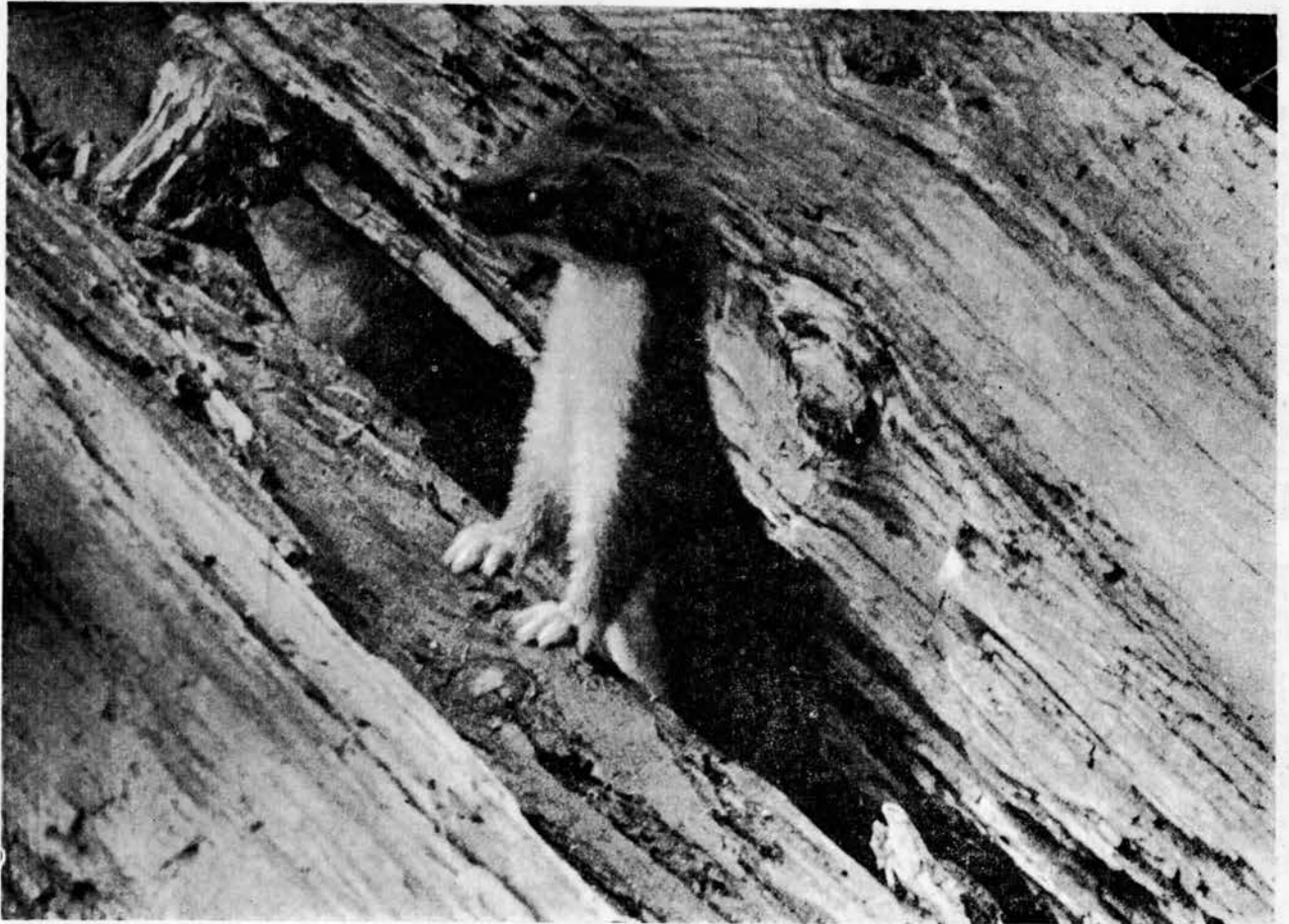


# 山と博物館

第14巻 第8号

1969年8月25日

大町山岳博物館



朽木の割目からのぞいたホンドオコジヨ (北ア爺ガ岳にて)

撮影 成 沢 兼

## 10年前のこと

黒部ダムは解放以来年々観光客はその数を増し、昨年は「黒部の太陽」のヒットとあいまって、そのピークを迎えた。

そして、今年もダムに遊覧船が浮び、来年の八月には、黒部ダム一立山室堂を結ぶ地下ケーブル、ロープウェイ、立山トンネル自動車道完成しようとしている。

観光開発のみは年々新しい企画がされ続けている。

黒部ダムの建設当時、博物館が中心になって針の木岳周辺の総合調査がなされた。

この調査はやがて完成され一般に公開されるであろうダムを訪れる人々に、自然を満喫してもらうための基礎となるものであった。

それは、自然観察路、野外施設、博物館、動植物の野外観察所等々、それぞれを環境を生かしたもので、この構想は「針の木自然園」と呼ばれ、日本の国立公園では類をみない、新しい利用方法であり厚生省も注目しバックアップをしたのだけでも……

一般解放から六年、現在のトロリーバスの駅舎の横に売店が増築されつつある。そこに博物館が作られる予定であったことは今知る人の方が少ない。そして「針ノ木自然園」の構想は今だに日の目をみしていない。

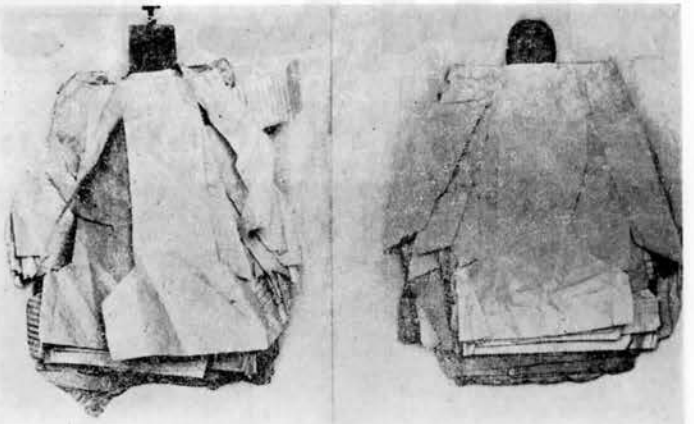
近頃は自然を楽しみつつ学ぶ、修学旅行や林間学校の傾向である。遅ればせながら自然観察路をつけようという計画が観光業者の間にあるようである。

高度成長のひずみか、人間が機械に追いかけられる昨今、いざ「針ノ木自然園」のような自然を主体としたものが、近い将来強く要求されることは間違いない。長い目でみればそれが観光人口を増加させていく基でもある。観光客から金ばかりまき上げようとするのが観光事業ではあるまい、ギブ・アンド・テイクしかし現状は自然保護も地元観光も大資本に押し流された感がある。先見の明がないと云うものだろうか？

(クチ猿)

# 七夕人形をめぐる

田中 磐



日本民俗資料館所蔵

七夕人形(左-男 右-女) 御神体形

松本地方で七夕に人形を飾る習俗があるのを実見したのは昭和二十一年の夏のことである。当時の松本記念館(後に松本市立博物館と改称、現在の日本民俗資料館の前身)に蔵されていた古いアルバムに貼ってあった市内市上町あたりの旧家で、七夕人形を飾った光景を見出すことができた。ほこりにまみれて旧松本町大名主(大庄屋)今井六右衛門家に蔵され、後に記念館に寄贈された紙製の七夕人形に接することができたのはその年であった。また、その年、足長(あしなが)と呼ばれる奇妙な顔かたちの、取外し自在の腕木(うでぎ)を持った足の長い木製の七夕人形も館内の収納箱から取出し由緒を尋ね出すことができた。

この足長人形は足長姫とも呼ばれ、全長四六センチ、頭に白い胡粉を塗り、目鼻等は墨描きしてあり、頭部は紺青、下脣、口唇は朱で隈取(くまど)ってある誠に奇妙な、またひ

ようきんな顔立ちの人形である。昭和九年、住山久治氏が当時既に珍らしくなっていた七夕人形の一つであり郷土玩具の一つと考えられていたこの足長を複製頒布し好事家に配ったもの、中の一箇であったことも判った。頒布会に際して附けられた住山氏の解説書によれば、別名は前記の通り足長姫で、銀河若し三粒の雨あるときは、この足長姫が殿様・姫君と呼ばれる男女の形の人形を背負って銀河を渡るという俗説があるとのことである。どう見ても女性格の人形ではなく、安曇地方で盛んに飾られた、かゝた(かわこし・川渡り)と同一系統の人形で、松本地方で俗にいうところの尻(しっ)ばさみ(着物の尻を端折る)して軒先へ吊す型式の人形で奴(やつこ)をかたどったものと推察される。

七夕にたとえ雨が三粒でも降れば、彦星と姫星とが銀河が増水して相違うことができなくなり、従って農作に害を与える虫(子)が生れない。それで反って降雨があった方がよいという考え方が意外に多く日本各地にある。都会風の一年に一度、牽牛星と織女星とが遇えるとする、またそれを祝福する思想とは裏表であった興味深い。計らずも松本地方にも古くから「三粒の雨」の考え方があり、そこへ出現するのがこの足長で都会風の両星相遇の信仰を援ける仲立ち役を演じている。

庭では、昔ながらに七夕の夜は軒先へ人形を吊して飾る風習が続いていた。

一方、子供の着物を男女一対の板製の人形に掛けて軒先へ吊す型式のものがあることも判り、昔風のものよりやゝ大型の艶(つや)紙というきらきら光る紙で作られる人形と、板製の現代風の童形の顔立ちの人形が市販されていることもその頃知り得た。

七夕をめぐる信仰、習俗に特色あるものを見出し、各種各様、とりとめのない位豊富な人形の収集を思い立ち、同時に分類して体系付けを行うことを計画して早速着手した。また一方、文献を調べ、全国各地の民俗学研究者に照会状を宛てて数多くの回答を得た。そして、松本城下町に残る七夕人形と近郊農村部に残るものを採訪し四五点に垂んとするコレクションを得た。この収集品を得るまでに数年の日子を要している。繁務の傍らであり、七夕人形収集にのみ没頭できなかったのでこのように日数がかゝったのである。

犀川筋の八坂地方では人がた風の人形を七夕明けの朝、流す風習があるのを知り、地元下の旧藩士の家庭からは東北地方のおしらせを思わせる紙を貼り合わせた、これが七夕人形であろうかと頭を傾けるほどの奇抜な人形を寄贈して貰ったりした。

松本本町筋の旧家であった酒井某家からは白馬をかたどった紙製の馬に跨る日笠を冠った七夕人形が寄贈された。これがいうところの、七夕の迎え馬に乗った七夕人形であろうと実物を手にしたときいゝ知れぬ喜びに溢ることができた。というのには七夕の迎え馬の習俗についてアンケイトを發した回答として、仙台市六郷、七郷、高砂地方では七月六日夜、マコモ、麦ワラで二匹の馬を作り屋根の上へ乗せる。田の神がこれに乗り、この夜、田畑を見廻る。磐城相馬市でも七夕の迎え馬を六日、



足長(単独のもの) 七夕人形(着物かけ形) 日本民俗資料館蔵

小麦ワラで作る。酒田市でも同様。「才時習俗語彙」によれば「武蔵北多摩郡・入間郡にも同様、七夕の馬を作る。越後・魚沼郡では七夕人形と共にワラの馬を作り七月一日頃から飾る。七夕様に供えるものという。磐城の石城郡地方ではムカヘウマという。」とあることによつて一つの新例を見出したからである。即ち、これらの回答や文献によつて関東、東北、越後の各地に七夕の迎え馬の信仰があり、盆行事とも関係があり、松本で発見された七夕の迎え馬らしきものに乗る人形は古人の脳裡に描かれた神としての七夕人形ではなかるうか。古くは松本地方にも七夕の迎え馬の考えがあったことを窺い知り得たことである。

古人は神は天上から降るものという信仰を持ち、神馬に乗って天降(あまくだ)ると考えていた。他地方の七夕の迎え馬には人形を殆んど伴わないのに反し、松本地方では具体的な人の姿の偶像のものを伴っていることが窺知できる。

この場合、人形は一体で男女一対でないことが特徴である。前記の足長と同様、七夕人形には孤立した一体のものがあることを特記しておきたい。そして、今井六右衛門家に旧蔵されていた人形のうち、角形の木製に目鼻

を描き、袴形の紙の着衣を着けているのが一体だけあり上衣は青色で袴は茶褐色である。これも一体だけのもので女形の人形を伴わない。

ところで、かゝり(かわこし)と呼ばれる角材の大型の人形は概して有鬚(ぜん)武骨ないかめしい顔付のものである。腕木が付いて、二本の足がぶらぶらと垂下している。

この人形には子供の着物を掛けて尻を端折る。天の河を渡るという意味をこめている。

かゝり型の人形は単独のものもあれば男女一對のものもある。その場合女形のもは板製のもので腕木がついて男形同様、着物を掛けて吊す型式のものである。

角材と板製の男女一對のもので年代がはっきり判るものは松本市出居番町の二木家から寄贈されたものである。それは元治元年間(一、八六四)製作のものでその時代を偲ばせる髪形を墨書きしている。単独のものが古いか一對のものが新しいかは別としてこの時代に既に男女をかたどった木製の人形があったことが判る。

さて、昭和二九年秋、「地方研究論叢」が刊行されるに先立ち松本地方の七夕人形について執筆を依頼され、四型式に分類できた七夕



姫路市 白浜地区の七夕祭り

人形について概説を行いた得た。四分類というのは次の型式である。

1、御神体型：毎年、人がたの紙を丁寧に貼り合わせて保存する型式のもの。紙は五色の色紙(いろがみ)を用いる。毎年、異った色の紙を貼って行く。角材または板を軸木とする。顔は墨書き、五〇年前に廃絶、長さ通常一五センチ位、東北地方のおしらさまを思わせるもの。

2、着物掛け型：角材または板を貼り合わせた長方形の箱に腕木と脚を付ける。これに子供の着物をきせて必ず裾を端折るようにして軒先へ吊す。男女一對のもの、または男形だけのものもある。かゝり(かわこし)と呼ばれるものはこの部に属する。

3、紙びな型：古いものほど小型であるように顔は大部分は木版刷り、衣裳は紙製。明治中期頃から長さ六〇センチに及ぶものが出てきている。鑑賞用の人形とでも名付けられるもの。

4、流しびな型：北安曇、陸郷、八坂村地方では八月八日の朝、色紙か七夕紙と呼ばれる特別な紙を使って人がたに裁ち、てるてる坊主式の紙の芯の人形を作って子供達が川へ流す。今日でも依然として昔風の髪形になぞらえて古風なまげ風に頭部を作る。

以上の通りであるが、その後には次々と収集されてきた七夕人形はいずれも右の四型式にあてはまっている。

松本市寿地区赤木部落の青木同姓では、古くから七夕のとき杉板で屋根をこしらえ簡素な祠型(ほこらがた)の覆いを作り、その下に小さな角材で作った男女の人形を吊す。青と赤紙の衣をまとい目を墨描きして衣は年々更新する。人形は長

さ五センチほどの愛らしいもの。これは明瞭に御神体ともいべきもので1、の分類に入るものである。

天明三年(一、七八三)、旅行者、菅江真澄が委寧(いな)の中路(なかもち)なる書物の中に筑摩郡洗馬村の七夕祭りの光景を記しているが、天明四年の「来目路(くめじ)の橋」の中にも松本地方の星祭の事を描写している。

また、文化一三年(一、八一六)刊の喜多川信節の筆に成る「嬉遊笑覧」には「越後・信濃の国々では七月一日より七夕に至るまで家毎に軒に縄を張り管の人形を吊す云々」とみえる。そして随筆「塩尻にも七夕人形のことあり、松本城・水野氏時代のことを記した「松本御代記」にも「七夕には赤・青・黄等の織紙にて羽織たち、木にて七夕と名付こしらへ右羽織を着せ六日より細引へ通し、あいだ、あいだ、女七夕を紙にて裁ち懸置く也」とかなり具体的な描写を行っている。この松本御代記は早稲田大学図書館に於て先年、購入した貴重な水野家資料の中にあるもので正保(約一、六四六)享保(一、七二四)頃の七夕まつりの光景を想像できるものである。

さて、報告例を一つ次に挙げると、信濃国境の北安曇郡小谷村戸土(とど)地方で行われている風習は、部落の入口へ七五三縄を張り、七夕人形を色紙で作し、背に荷物を負わせた姿にして七夕の日に飾り、前記の部落の道路の一ヶ所に縄を高く張り吊す。

江戸時代に幕府が学者、屋代弘賢に命じて諸国の風俗習慣を取調べさせたときのアンケートとしての風俗問答の中の「越後長岡領風俗問答」には「栃尾てふ山里には、ワラもて人形、馬などを作り、箱(やり)・挟(はさみ)箱持たせて縄に吊り、入口の外木の枝に張りおく、是を天河といふ」とある。「松本御代記」「委寧の中路」「来目路の橋」「嬉遊笑覧」越後長岡領風俗問答のいずれにも共通して見られる七夕人形の飾り方は縄

糸などを張って人形を吊すことである。今日も同様な方法であり、数百年来、変らぬのがみられる。

こゝで考えられることは家の軒先や、部落の入口へ縄を張り人形を吊すことは、かつては部落単位、または同族団の行事であり、次第に家々の行事へと移行したのではなからうかということである。

北信濃中野市地方、下高井郡地方などでは小正月の行事の一つに木製の道祖神を作り、それに白い紙の着衣を着せ家の戸間口の上方に祠を作ってまつ。男女一對で日鼻は墨描きでヌルデ、ヤナギなどの木を切って作る。これは火災、盗難よけの護符の役割も持つ道祖神は魔障のものを遮(さえぎ)り遠ざける役をもつが、全く同じような姿の七夕人形が松本平地方でも七夕のとき用いられることは同様な役目を負わしているのではなからうかとも思われる。

盗難除けに七夕祭りの紙が用いられた習俗は、山中共古翁が「甲斐の落葉」の中に、甲府善光寺地籍で七夕祭りの赤紙を衣服として木を削った人形を戸口にさげているのを見たこと記している。

着物掛け型の人形に子供の着物をかける習俗は、七夕様に着物を借せると襟数が増えるとか幸福に恵まれるとかいう信仰に発している。この七夕に着衣貸与のことは北安曇郡下一帯、大町市地方にも広くみられることで、とき恰も初秋の候に当り虫干しの行事とも習合したものと考えられる。

七夕人形は古来、初児の生れた家へ近親者から贈答品として贈られその児の成長が祈られる。男児に対してのみ贈られる例が多い。さて、昨夏、姫路市在住の郷土玩具愛好家である井上重義氏が、姫路地方でタナバタサンノキモノと呼んで、人がた風の華麗な紙の人形を軒先へ七夕のとき飾る風習があることを報告されてきた。現在、私の手許に同氏から送られた美しい紙の人形数点と写真数葉が研究

# ホロムイソウ分布の南限について

寺 島 虎 男

一九四一年(昭和十六年)の九月一日、北安曇郡北部の平地並びに山地の植物採集に東京都立大学理学部附属牧野標本館の水島正美教授に同行した一人であったが、南神城の親海湿原に赴いた際、偶然水島教授により発見されたのがこのホロムイソウである。

分類上より云うと、種子植物門、単子葉綱ホロムイソウ科のホロムイソウ属(*Scheuchzeria L.*) 種、ホロムイソウ (*Scheuchzeria palustris L.*) である。一科一属の貴重な植物と云える。世界の分布からみると北半球温帯北部で、北海道、朝鮮北部、千島、樺太には広布をみる。本邦においては日光、尾瀬ヶ原より以北の地だけに分布していた湿原植物であった。

一見したところ、余り見ばえのない地味な草本であるが、長野県内では恐らく最初の発見であり、この南神城、親海湿原のオオミ

南神城親海湿原 湿原に黒く線状に立っているのがホロムイソウである。(昭和四四年六月一日撮影)



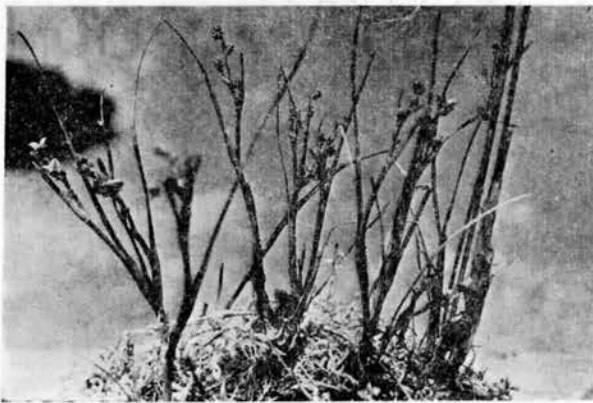
ズゴケをしとねとして生えている隔離分布を水島教授によると、この地点が南限と推定される由。この意味においても大いに生育地域の保護策を考えねばならぬ事である。個体数も相当にみられ、今ところ環境条件がよいので次第に繁殖している。湿原の面積が約二〇〇ヘクタールで、そのほぼ中央部山ぎわの湿原で、凡そ二〜三平方メートルにわたった生域とみられる。ズゴケ・トウシンソウ科のほかにサワギキョウ・エゾミソハギ・モウセンゴケ・ウメバチソウ・ノハナショウブ等がみられ、なお低木のレンゲツツジ・ノリウツギ等が疎在している領域内である、これが指標種と云える。

最初の時期が初秋であった為、全部が結実して、花を見る事ができなかった。花期が七月とあるので、第二回は四三年七月の初めに現地へ赴き、ミズゴケの中より生い茂るトウシンソウやズゴケ科・サワギキョウ・エゾミソハギ等の雑品の間から漸く見出したホロムイソウはやはり結実してしまつて落胆した。この際はホロムイソウの花茎(約三〜一五センチメートルより地下茎を曳いて節より葉だけの葉を二〇〜三〇センチメートル位挺出しているもののみ出した。

尚葉は線形で半円柱形、先が細くて円くなっているところをルーペでみたところ小孔のあるのに気付いたが、さてこの小孔は何のたの働きをなすか、水孔でもあるのか判然しないが、兎に角相当の収穫でもあった。第三回の調査は本年六月一日に早めに赴いたところ幸にして開花中のものを見出し、望みを達することができた。果時には六〜二二ミリメートルにも達する

差異がある。花被片は六で緑色、だ円形、長さ三ミリメートル位、しべは六で葯は線状だ円形、長さは三ミリメートル、しべの心皮は殆んど離生し、下部で合生、子房は長さ三ミリメートル、中途で裂開する。種子は長さだ円形で長さ三ミリメートルで黒色である。湿原に生を保つ特殊な植物であるため、絶滅しないようその繁殖を念じているものであるが、幸この地域は水温低く、水田には適しないよう、開拓される心配はまずないとのことでこの点樂觀できそうである。〔昭和四四年七月一日〕(塚原高校講師)

ミズゴケをしとねとして生育するホロムイソウの全形。昭和四四年六月一日親海湿原に採取したもので今は既にほぼ完全に結実している。



## 野も山も人の心も美しく

(長野県美化推進標語)

(前頁より) 資料としてある。同地方にも数多くの民俗学者がおり、今まで誰も注目しないし報告、発表例がないという。このキモノは一度作ると傷まない限り毎年同じものを出して飾る。昔は子供のある家もない家も飾ったという。現在、キモノは姫路市大塚、的形地区では売品として売っている。販売し出したのは四〇〇年程前のこと、売品となつてからは袴をつけたり模様をつけたり次第に奇麗になつたとのこと。

お盆、一週間前の七夕行事について未知、未聞のことが非常に多い。神奈川県下にも一例、七夕人形らしいものを飾る行事があるらしいことを先頃、探り得た。大町、北安曇地方はそれにつけても古くからの七夕行事の一つの源流を調べ出す端緒を得られる大切な地帯であると考へてゐる。現在日本民俗資料館に所蔵されている数十点の七夕人形コレクションのうち、四五点は『七夕行事の一つの古い形を残す点で注目すべきものであり、七夕行事の変遷を究明する上できわめて重要である。このコレクションは江戸時代から現代に至る各種人形を永年にわたり収集したもので、地域的な特色を示すものとしてきわめて優秀である。』として国の重要民俗資料に指定されている。

(財団法人・日本民俗資料館 館長)

## 博物館だより

▽ライチョウ扇沢へ

今まで低地の博物館(七八〇ㇺ)で増殖を試みていたライチョウ親子は、八月六日気温の低い扇沢(一、四〇〇ㇺ)へ移り、ますます元気に育っている。四八個産卵したうち三一個が孵化、しかし高温多湿の気候等の諸条件が重なり、低地孵化で生存しているヒナは一羽、親七羽である。この一羽のヒナが成鳥になれば低地で産卵孵化した日本第一号となる。

山と博物館 第14巻第8号

発行所 長野県大町市TEL大町〇三二

印刷所 大町市下仲町 大町山岳博物館

定価 年額 三〇〇円 (送料共)